

癌の告知に関するアンケート調査について

中原英臣^{*}、富家 孝^{**}、土家 清
岡本 研、長田 厚、加賀美真人

最近、癌の告知という問題が社会的にも医学的にも大きな課題となりはじめている。こうした点から、我々は現在、日本において癌の告知に対してどのような認識が持たれているかを知るために、癌の告知に関するアンケート調査を行った。387名の一般の人と84名の医師から得られた回答の結果では、一般の人で86%、医師で61%といった極めて多くの人が癌を知らせてほしいと答えた。こうしたアンケート調査の結果や、医学の進歩によって癌の5年生存率が急速に増加しつつある現状を考えると、近い将来癌が告知される時代が来るものと思われる。

キーワード：癌、癌の告知

1. はじめに

癌に対する昨今の意識の変化によって、医師が癌患者に癌であることを知らせる、いわゆる癌の告知の問題が最近大きな社会的課題となりつつある。また患者が癌であることを知らせて欲しいと言う考えが一般に表面化してきている。しかし癌=死という意識が多く日本人の意識の中に少しでも残っていれば、癌患者に正しい病名を知らせることは死を告げることと等しいことになってしまう。

こうした現状を踏まえて医師は癌の告知の問題についてどのような認識を持っているか、また一般の人たちはどのような様子を考えているのかアンケート調査を行った。

2. 方法

我々は、表1に示すようなアンケートを作製し1987年9月10日より約2週間にわたって山梨医大の医師と山梨県内の人に回答を求めた。

* 山梨医科大学 保健学 I 講座

** 早稲田大学 教育学部

(受付：昭和62年10月15日)

3. 結果

アンケートの回答を求めた510名の対象者中471名の回答が得られた。回答率は92%であった。471名の回答者中医師は84名である。一般の回答者は387名で男性は165名、女性は222名である。

今回得られた一般の者の回答中、86%の人が癌を知らせて欲しいと答えた。男女別にみると男性で91%、女性で82%の人が癌を知らせて欲しいと思っている。

癌であることを知らせて欲しいと答えた人の内84%の人は癌の告知を家族よりも医師から受けたいと答えた。なお男女別にみると、癌を知らせてくれる人に医師を選んだ男性は87%、女性は82%であった。

家族が癌にかかったときに、本人に癌を知らせることができると答えた人は男性では46%、女性では15%で、全体では29%であった。

次に、早期胃ガンがほぼ100%治るという事実を知っている人は74%で、男性91%、女性61%である。このように癌でもほぼ100%治ることがわかれば癌を知らせて欲しいという人は男性で96%、女性で88%で、全体では91%であった。

また、アメリカでは原則として癌患者に病名が正し

表1. アンケートの質問

- 年齢 (才) 性別 (男 女)
- 一 般 用**
- 1 : もしも貴方がガンにかかったら、そのことを知らせて欲しいですか?
(欲しい 欲しくない)
- 前の質問に Y E S と答えた方は 2 番をお答えください。
- 2 : 貴方にガンにかかっていることを知らせてくれる人は、家族と医者のどちらがよいですか?
(家 族 医 者)
- 3 : もしも家族がガンにかかったとしたら、貴方はそのことを知らせることができますか?
(できる できない)
- 4 : 早期の胃ガンがほぼ 1 0 0 % 治る事を知っていますか?
(知っている 知らない)
- 5 : 1 0 0 % 治る事を知っていてもガンを知らせて欲しくないですか?
(欲しい 欲しくない)
- 6 : アメリカではほぼ 1 0 0 % ガンが患者に知らされていることをしていますか?
(知っている 知らない)
- 年齢 (才) 性別 (男 女)
- 医 師 用**
- 1 : 貴方はガンの患者にガンを知らせたことがありますか?
(ある ない)
- 前の質問に Y E S と答えた方は 2 番、3 番を、N O の方は 4 番をお答えください。
- 2 : どれくらいの割合ですか?
a : 必ず知らせている。 b : 特別な場合のみ知らせている。
- 3 : 良かったと思いますか?
(良かった 悪かった)
- 4 : 治癒が可能と思われる場合でも、ガンを知らせない方がよいと思いますか?
(思う 思わない)
- 5 : 将来、日本でもガンを知らせる時代がくると思いますか?
(来ない 5年後 10年後 15年後)
- 6 : もしも貴方がガンにかかったら、そのことを知らせて欲しいですか?
(欲しい 欲しくない)
- 前の質問に Y E S と答えた方は 7 番、N O の方は 8 番をお答えください。
- 7 : 貴方がガンにかかっていることを知らせてくれる人は、家族と医者のどちらがよいですか?
(家 族 医 者)
- 8 : もしも貴方が末期のガンでもガンを知らせて欲しくないですか?
(欲しい 欲しくない)
- ガンを知らせるという問題について何かコメントをお願いします。

く知らされているわけだが、そうした事実を知っている人は54%（男性54%、女性55%）であった。

今回調査対象とした84名の医師の中で、癌患者に病名を知らせた経験が一回でもある人は36%であった。癌を告知した経験のある医師は、全員特別な場合にのみ病名を知らせたと回答している。こうした癌を告知したケースでは、「病名を知らせて良かったか」という質問に対しては20%の医師がどちらとも言えないと回答したが、知らせて悪かったという医師は存在しなかった。

癌の治癒が可能と思われるケースでも、癌であることを知らせない方がよいと答えた医師は25%であった。また、「将来日本で癌を知らせる時代がくると思いますか」の質問に対しては、26%の医師が将来的にも癌を告知する時代はこないと回答した。5年後に来ると回答した医師が16%、以下10年後が32%、15年後が26%という結果で、いずれは癌を告知する時代がくると考えている医師は74%であった。

「癌にかかった時自分に知らせて欲しいですか」という質問に対しては癌であることを知らせて欲しいと回答した医師が61%となった。癌を知らせて欲しいと回答した医師の中で、全ての医師がその際に癌を知らせてくれるのは医師がよいと答えた。さらに末期癌でも知らせて欲しいと答えた医師はいなかった。

4. 考 察

癌の告知という問題が最近社会的課題となりつつあることは、本年の日本癌学会でも癌の告知に関する発表がなされたことや本年5月の読売新聞や10月の毎日新聞でのアンケート調査などからも明かである。

今回、我々が行った癌の告知に関するアンケート調査でも、回答率92%という極めて高い数字を示したことから、この問題に対する関心の高さがよくわかる。

我々のアンケート調査の結果では、回答した一般の人の86%という極めて多数の人が、癌にかかったときに病名を知らせて欲しいと考え、癌であることを知らせてくれる相手に医師を求めていることがわかる。この結果は家族が癌患者に癌であることを知らせるときの苦悩に対する配慮からと考えられる。また一般の人は医師と患者の間に正しい情報に基づいた強い信頼関係を作り、これをよりどころとして治療を受けたい

と考えているものと思える。

一方、医師としても癌患者に対して原則として癌であることを知らせる時代がくることを望み、また正しい病名を知らせることによって患者との間に信頼関係を確立した上で、十分な治療をしたいと考えていると思われる結果が今回の調査から得られた。

昭和62年5月に実施した読売新聞の全国世論調査によれば癌を知らせて欲しいと回答した人は64%であった。さらに昭和62年9月に毎日新聞社が行った癌に関する全国世論調査でも治る見込みがあるときには78%、治る見込みがないときでも59%の人が知らせて欲しいと回答している。山梨県に於て実施した我々のアンケート調査と比較すると多少の差があるものの、一般の人の間での癌の告知に関する関心は極めて高いものと思われる。

日本と違ってアメリカでは原則として癌患者に対して正しい病名が知らされている。確かに癌を知らせることは、癌であることを知らせた後も責任を持って治療し、なおかつ患者と一対一で対応していかなくてはならないから、医師にとっては大変なことである。しかし、アメリカの医師にはできて、日本では困難であるというのでは寂しい気がする。

「癌を知らせるか知らせないかは、自転車に乗ることと同じ様なものである。」と我々は思う。自転車に乗れない子供は、自転車は何かひどく恐ろしいものである。転んで怪我をするのじゃないか、親が後ろから持っていても離れた途端に転ぶんじゃないかといろいろ考えてしまうので、自転車に乗っている人がひどく立派にみえてしまう。ところが一度乗ってしまえばなんとということない。自転車は実に便利で今度は乗れない友達を馬鹿にしながら乗れるのである。

乗るまでが恐くて、一度乗ってしまえばなんとということはない、ということなのだ。我々は、日本でもそろそろ癌を知らせると言う自転車に乗るべきだろうと思う。

今の日本人は、アメリカ人が自転車に乗っているのを見て感心している子供のようなものだ。自転車に乗れないためにエネルギーを無駄使いしている。実際に、患者に癌を隠すためのエネルギーは大変なものである。とにかく家族、患者、医師、看護婦全てを含めて、本人に癌であるということを隠し続ける、それも一週間や二週間でなく何年という単位で隠し続けるエネルギー

は膨大である。医師だけが疲れるのなら我慢もするけれど、家族も疲れるし、おそらく患者も疲れるのではないかと思われる。

同じ人間なのにアメリカ人にできて日本人にできない。こんな情けないことはない。アメリカでは癌を知らせると言うことだけでなく、医師と患者の関係は全く新しいスタイルになっている。日本でも一日も早く、医師と患者が人間として対等の強い信頼関係を作り上げ、そして癌に対する闘いを医師と患者が一体となって進める時代が来てほしいものである。

文 献

- 1) 田沢公樹、中島宏昭、石原潤一、堀地直也、高橋昭三、佐々木康綱：わが国の肺癌化学療法におけるinformed consent. 日癌治, 21,2454-2459, 1986.
- 2) 近藤 誠：問われる患者の「知る権利」モダンメディスン, 87-6, 96-99, 1987.
- 3) 近藤 誠、橋本省三、雨宮 厚、東泉東一：乳房保存による乳癌の治療日本医事新報, 3289, 24-29, 1987.
- 4) 中原英臣：癌を告知する時代が来た. 文芸春秋, 65(14), 160-169, 1987.

Abstract

Questionnaire concerning the problem of the patient's being told of his malignancy

Hideomi NAKAHARA*, Takashi FUKUE**,
Kiyoshi TSUCHIYA, Ken OKAMOTO,
Atsushi OSADA and Masato KAGAMI

In a survey conducted by us in September 1987, 510 people were contacted by a questionnaire concerning the problem of the patient's being told his malignancy. Of these 510 people contacted, 471 (91%) people responded. As analysis of these responses disclosed that 82% of respondents said patient's are told of their cancer. It seems necessary to establish "informed consent procedure" in Japan also so that the patient's rights may be defended and the patient and his family's understanding of and co-operation in the performance of therapy might also be facilitated.

* Department of Environmental Health

** Division of Education, Waseda University